

まぼろしのキヨミ(湖) 探検旅行の調査報告 研修旅行

ホツマツタエには、富士八湖が記述されている。その内の三湖は、現在では不明になっている。またホツマツタエ東京赤坂研究会では年一回恒例の「研修旅行」を行っている。そこで一昨年はシビレウミ、昨年はシビレウミとキヨミの不明三湖の内の二湖について、探索旅行を行った。旅行のスケジュールの 1 日目は、東京・赤坂を出発～富士宮・山宮の郷土史家を訪ねシビレウミの情報収集～芝川・旅館に宿泊。2 日目は、芝川を出発～静岡市清水区三保の「羽衣の松」～清見寺の予定であった。

赤坂出発～富士宮・山宮

今回の探索旅行は、秋晴れに恵まれた。さー出発。調査メンバーは、元赤坂でボルボ外車とホンダ社のステップワゴンの 2 台に分乗し出発。品川駅前ですぐと落ち合い、調査メンバーの 10 名が揃った。いつもながら都内を抜けるのは時間がかかるが、東名・港北パーキングエリアで一服した時は、10 時を過ぎていた。今回の旅行の初日目の予定は、急ぐ特別な理由があつた。

前回の調査で訪問した「四尾連湖」は、富士山の北西方向の山梨県市川大門にあり、ホツマツタエに記述の南の方角にある「シビレウミ」を発見できてないジレンマがあつた。そのため一年かけて富士宮市の歴史家や名士を捜して来たが、なかなか捜せずじまつた。そんな時に富士山浅間大社を思い出し、そして富士山浅間大社の窓口に「山宮近くで郷土歴史家」を紹介して頂くことを電話でご相談したところ、快く富士山浅間大社の前氏子総代の赤池氏をご紹介して頂いた。そんな訳で「赤池さん」と約束した時間が、20 日の正午に迫っていた。東名・富士インターを 12 時頃に通過。目的の赤池さんのお蕎麦屋に到着は 12 時 40 分頃になっていたが、赤池さんの家族は暖かく迎えて下さった。昼食は午後 1 時になったが、思い思いに山菜蕎麦や月見蕎麦など野外のテーブルで頂いたことも思い出になった。

赤池さんとの談笑

食事の後、赤池さんの大きな自宅に寄せて頂いた。通された部屋は座敷で、大きいテーブルを挟んで赤坂例会の静岡・山宮会が開かれた。今回の講師は赤池さんまた、赤池さんの奥さんも同席して頂いて、美味しいお菓子やお茶やミカンを頂きながらお話をお聞きした。まず浅間大社のこと、富士山の噴火のこと、それに「赤池」性などについてお話を聞きした。その中で「赤池性」の発祥の地は、どうも富士宮の出所ではなく九州の福岡らしいとのことでした。また山宮地区に古い湖で、現在干し上がっている湖がないかをお聞きした。すると山宮より西に 2～3km 先にあつたらしいお話もお聞きした。談笑は約 90 分くらい楽しい談笑であつた。そして赤池さん熱意に全員でお礼を述べ、山宮・浅間大社にお参りしてから早速、「幻の湖」捜しに出かけた。

シビレウミか?

調査隊の 2 台の車は、山宮より西方向にゆっくり走って行く。地形を見ては幻か、この辺りが湖だったとみんな思い思いに想像する。秋の収穫が終えた畑を見ながら 2～3 個の家々を目にした。

この辺りかと下車し一家の中で「古い湖」のことをお聞きして見た。すると「古い湖」があったとのことである。お聞きした家の家人が「静岡県(北山地区) 富士宮市土地宝典 その六 地番地積地目入図」いわゆる、土地の地図を広げてくれた。すると確かに「湖」が記載されていた。地図上に久保上地区と高山地区の間に「象ヶ池」と記載されていた。家人にお礼を述べて、早速「象ヶ池」へと歩いて行く。池への道は少し登り坂になっていて杉林の入り口に、案内板が立っていた。

案内板は、「石川八幡宮・釈迦堂・由緒」と書かれていた。その案内板の末尾に象ヶ池のことが記載されていた。「この地の西側には「象ヶ池と呼ばれる池があった。水源は天母山西側の不動ヶ谷という。駿河記より」。現在の象ヶ池は杉林になっており、土地は自然の高低になっており、この低地部に湖であったろうと想像がついた。だがこの湖も火山岩の上に位置した湖のため、雨期の一時的な湖であったであろうか。現在は湖底部は雑草が一面を覆っていた。

そして象ヶ池と呼ばれるこの湖が、ホツマツタエに記述の「シビレウミ?」かと皆んなも疑問をもったであろうか?。そして皆んなも象ヶ池が「旧シビレウミ」である説を否定していただろうと思う。その理由は、「スド湖」もそうだった様に「シビレウミ」であれば、例えホツマツタエ当時の古い時代でも、それは現在にも確実に「シビレウミ」の地名が存続していたからである。そして半分落胆した一同は、象ヶ池を後にして今夜の宿の芝川町に急いだ。宿は一昨年、昨年と2年続けての瓜島温泉の翠紅荘になった。

キヨミ(湖)と旧・清水市

待ちに待った「キヨミ(湖)」捜しの朝(2日目)が始まった。早速、翠紅荘を出発。キヨミ(湖)捜しへの道中は、富士川沿いに一旦下り、途中から一号線に合流し由比ヶ浜、興津を通過し、清水市(現静岡市清水区)に入る。それにしても、清水市の語源は前後の文より読者は「もう」わかって頂いたと思うが、清水を音読みにするとキヨミになる。従って清水は、キヨミが原語で→キヨ+ミ→清+水→清水であったことが容易にわかってくる。するとキヨミは清水市に存在したことになり、地図を見ると現に清見寺が確認さる。また地図に「清見潟」の名を目にし砂浜を連想させるが、現在は埠頭になっており、古の砂浜の調査はできそうになく、このまま「三保の松原」「羽衣の松」を先に調査することになった。

三保の松原、羽衣の松

三保の松原は、駿河湾に臨む「名勝」地である。三保の松原の入り口には、「三保松原」の案内板があった。説明文は「名勝 三保松原 霊峰富士の眺望、絶景をもって天下に識られているここ三保の松原は、遠くは万葉歌人に詠歌され、・・・・(以降省略)・・。」と風情のある説明が記載されていた。そこから左手に掲示板を眺めながら、なだらかな階段を登りつつ、いくつかの短歌の立て札を目にした。「忘れめや山路打出て清見がた はるかに三保の浦の松原(新古今集)」「清見潟ふじの畑や消えぬらん 月影みがくみほのうらなみ(後鳥羽院)」。

この二つの短歌には、共通の単語を目にした。それは「清見がた」「清見潟」の「清見」である。そしてこの短歌よりこの地区が、「清見」に関係ある地区であることを実感した。そしてそのことについて、調査隊員の全員がそう思ったに違いない。・・・・緩やかな階段を上り詰めると、松林越しに太平洋が眼下に望めた。その少し手前に枝振り良い松があり、あの有名な「羽衣の松」を目にすることができた。そこで全員で記念写真を撮り、茶屋で一服して羽衣の松を後にした。

幻のキヨミ、発見される

三保の松原の駐車場は広くて、調査隊はアスファルの場所に止めていたが、後方部に未舗装の土の駐車場があった。ふと誰かがその駐車場の約50m位離れた所に、石碑らしいものを発見した様で、一人二人と近寄って見た。すると碑は、「天女の池(羽車稲荷御上池)の由緒」と記載されていた。また驚くことなかれ「このところは、今では海岸砂丘の後退のために埋れて、平地になっておりますが、大昔にはきれいな清水を湛えた池であって・・・」と記載されていた。するとここは調査隊が探し求めていた「幻のキヨミ(湖)」であった可能性もある。まして時代的には「神代に葦原ノ中ッ国を天孫に平和の中にお譲り遊ばされた」と記載してあるところから、紀元前1200年頃には既に湖があったと推定される。

また「安閑天皇の御代に天降った、女が海で水遊びして・・・」と記載されている所から、安閑天皇の御代(西暦531年～535年)でも「湖」が確認されていたことになる。調査隊の一同は、この「天女の池(羽車稲荷御上池)の由緒」を観て感激したに違いないが、「ホツマツタエ」に記載されている「キヨミ(湖)」の存在が幻でなく古に存在していたことが、ここに証明されたことになった。探検旅行を終えて2～3週間経つたろうか「天女の池(羽車稲荷御上池)の由緒」に書かれていた「海岸砂丘の後退・・・」が気になって調べて観た。すると安部川の上流より河口に流された土砂が、太平洋の波により押し戻され「三保の松原」の砂丘をつくることがわかってきた。すると「海岸砂丘の後退・・・」頷ける事実であった。

天女の池(羽車稲荷御上池)の由緒

此処は今では海岸砂丘の後退のために埋れて平地になっておりますが、大昔にはきれいな清水を湛えた池であってその周囲は麗峰富士を背景にして野鳥をはじめ兎、雉、野鳥が群れ遊び松露をはじめいろいろのきのこの生える松林が茂ったところでありました。

神代に葦原ノ中ッ国を天孫に平和の中にお譲り遊ばされた大国主命即ち三穂津彦はその妃三穂津姫を伴ない天の日鷲に御同乗になられ遠く出雲の国(島根県)から有度浜即ち三保の州の羽衣海岸に御降臨になり旅塵をこの池で洗ひ流されたと言はれております。

更に又当海岸に安閑天皇の御代に天降った天女が海で水遊びして玉身体の塩気を洗ひ浄めた池であると伝えられております。

〇〇〇〇〇はかりみち
三保の海女(江戸川〇より)
羽衣メルヘンの会長
宮城島重男

昭和六一、一〇、三
手野畊雲書

清見瀧スポーツセンター、清見寺

羽衣の松、「天女の池(羽車稲荷御上池)の由緒」を後にして、キヨミにゆかりの「清見寺」に向かう。すると清見寺の近くに清見瀧スポーツセンターを目にした。地元の人たちにして見ると一般的な地名でも、ホツマツタエ研究者にして見ると「ホツマツタエが証明される」ことにつながる。清見寺は、旧東海道線のすぐ横の高台にあった。境内を一周して高台より、三保の松原を望むと古にあったろう「幻のキヨミ」が眼下にあったろうかと思ひながら帰途についた。

以上